九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

書評 桑野隆『20世紀ロシア思想史 宗教・革命・言語』

佐藤, 正則
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/2230005

出版情報：言語文化論究. 42, pp.65-68, 2019-03-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

書　評
桑野隆『20世紀ロシア思想史　宗教・革命・言語』

佐　藤　正　則

ソ連体制の終焉と前後して、ロシアではさまざまな新しい思想・文化運動が沸き起こった。また、これと並行して思想史の見直しも、とくに20世紀初頭の思想について、大きく進展し、かつてのソ連の公式哲学・歴史学では否定され、あるいは忘れられてきた数多くの思想家たちが再発見・再評価されるようになった。とりわけ脚光を浴びるようになったのは、宗教哲学者たちである。しかし、個別の思想家の研究は盛んであるものの、ロシア思想史の枠組みそのものは大きくは変化していない。こうした状況において、20世紀末までを視野に収めつつ、20世紀初頭から1930年代までのロシア思想史を新たな視座からとらえなおし、新たな枠組みをもちいて再構築することが求められている。

本書は、コンパクトな分量で20世紀初頭から1990年代までの時期を網羅しており、くわえて予備知識を持たない読者でも通読できる平易な記述がなされている。この点で既に世界にも類例がないのだが、しかし、本書はけっしてたんなる簡便な入門書ではない。

まず、一読して気づく本書の特徴は、とりあげている事象が、従来の「ロシア思想史」に比べて、はるかに広く、また比重の置きかたも異なっていることである。現在にいたるまでロシアでも欧米においても、宗教哲学と政治思想が「ロシア思想史」の主要な対象とみなされてきた。それにたいして本書では、宗教哲学と認識論の比重が軽く、ロシア思想史の枠内で論じられることの少なかった言語理論、記号論、構造主義や文学・芸術理論に大きな紙幅が割かれている。

これは、著者桑野の独特の価値基準によるものである。今日にいたるまでロシア思想史研究は、多くの場合、西欧とは異質な「ロシア的なもの」、ロシア的精神の特質を明らかにすることを目的に掲げてきた。それにたいし、本書は、ロシアの特殊性や独自性よりも、「「ロシアの運命」の枠を超えて生みだされていた思想」(240頁)、同時代とその後の世界の思想に関連づけることができ、世界的な思想・文化の問題とかかわることのできる思想や人物を優先的にとりあげている。こうした姿勢を桑野は長きにわたって貫いてきた。日本ロシア文学会大賞受賞講演でも、「私が魅力を感じる「人文知」は、極端にいうならば、ロシアそのものを知らなくとも理解でき、「引用できるような」知です」と述べられている。[1]

しかし、本書の新味は、とりあげる対象の目新しさに尽きるものではない。本書の最大の独創性は、その構成にある。既存の通史とはやや異なる章立てが採用されている。思想的・哲学的な立場(宗教哲学、マルクス主義など)にもとづく分類ではない。「実証主義を超えて」、「「ポスト宗教」思想」、「言語思想」、「革命思想」などといったやや広い枠を設けて、それぞれを一つの章としている。桑野自身は「緩やかな枠組み」、「「あいまいな」枠」(v-vi頁)と呼んでいる。さらに注目すべきことは、この緩やかな枠組みの中での思想家や事象の組み合わせかたである。哲学・思想的立場が対立する、あるいは活動分野の異なる思想家やグループが一つの章に収められている。こうした傾向

は、1920年代末までを対象とする第２－５章にとりわけ顕著である。また、同一の思想家（宗教哲学者フロレンスキー、マルクス主義者ボグダーノフ、ルナチャルスキー、バザーロフなど）が複数の章にまたがって何度も登場する。こうした本書の独自性は、たとえば、邦訳もあるフランスの研究者ルネ・ザパタの著書『ロシア・ソヴィエト哲学史』（18世紀から20世紀後半までを網羅する優れたコンパクトな通史である）と対照すれば、よりきわだつだろう。[2]

まず、バフチンは、「特定の枠にうまく収まらない」（viii 頁）として、ただ一人単独の章を与えられ、第１章に置かれている。第２章「実証主義を超えて」では、20世紀初頭の宗教哲学や「ロシア・コスミズム」といった「霊性重視」（24頁）の潮流と、ボリシェヴィキ（後のソ連共産党）の「建神主義」が並置されている。第３章「「ポスト宗教」思想」では、フォルマリズム・前期アヴァンギャルドといった芸術潮流と、アナーキズム（クロポトキン、トルストイ、象徴主義芸術理論家チュルコフ）が同居している。第４章「言語思想」では、狭義の言語学者・記号論者のみならず、宗教哲学者や心理学者ヴィゴツキー、フォルマリスト、構造主義者といった、立場も活動分野も異なる多彩な思想家たちが一堂に会している。さらには、第５章「革命思想」では、ボリシェヴィキの哲学・文化理論に、亡命知識人による新文明構想「ユーラシア主義」、後期アヴァンギャルドの芸術理論が組みあわされている。第６章「ソヴィエト哲学の確立」では、スターリン主義の公式哲学の成立過程と亡命宗教哲学者の思想が対比されている。第７章「雪解け時代の新潮流」では、記号論・構造主義、「異論派」の思想と活動が重点的にとりあげられ、第８章「ポストソ連思想」では、1991年のソ連体制終焉以降の思想界の状況が描かれている。

通常のロシア思想史の枠組みに通じた読者は、本書の各章に見られる異質な思想家たちの取り合わせを眼のあたりにして、とまどうかもしれない。また、本書の構成にややまとまりの悪さを感じる読者もいることであろう。こうした本書の構成の一因はもちろん、これまでロシア思想史の枠内で扱われることの少なかった思想家や事象をとりあげているため、それらが既存の枠組みにうまく収まりきれないことにある。しかし、これを本書の弱点とみなすべきではない。本書の構成の緩やかさや思想家たちの意外な組み合わせは、桑野の積極的な意図によるものであり、むしろここに本書の最大の意義が隠されている。

かつて桑野は、ロシア・アヴァンギャルド芸術を講義形式で平易に論じた著書『夢みる権利』において、分野や時系列にもとづく章立てではなく、アヴァンギャルドのさまざまな分野や芸術家・理論家に共通して見られる特徴やコンセプト（「日常生活批判」、「ウスローヴノスチ」、「演劇性」、「グロテスク」など）ごとに章を設けるという斬新な構成を採用していた。[3] 本書では、通史という制約があるためか、『夢みる権利』のように明示的かつ積極的に著者独自の視点や枠組みを提示しようとはしていない。しかし、時系列を守りながら、控えめにではあるものの、従来の思想史の枠組みでは異質とされてきたものを組み合わせることによって、既存の枠組みでは明らかにされない新たな論点・問題を浮かびあがらせようとしている。

たとえば、第２章では、宗教哲学とマルクス主義を、哲学的・思想的立場の違いを超えて、西欧近代の実証主義にたいする批判の一環としてとらえる視座を提示している、さらに、宗教哲学とマルクス主義双方に非合理的なものに依拠した人類の統合と進化の理念が存在することに眼を向け、両者を関連させて論じる可能性をも示している。また、第３章があつかう「ポスト宗教」思想とは、単純な反宗教思想・無神論のことではない。ここで光が当てられるのは「文学・芸術の自律性」（58頁）が持つ批判精神であり、文学・芸術・個人の精神の自律・自由、さらにそうした自律的で自由な諸個人による、外的強制力によらない新たな社会性の探求である。さらに、第５章で論じられる

「革命思想」は、狭義の政治的革命思想ではなく、社会のみならず世界をも直接つくりかえ、積極的に新たな体制をつくりだそうとする志向と拡大解釈することができる。それは、人間と世界との関係の再構築（人間と非人間とを同一の地平でとりあつかい、両者を同時につくりかえていこうとする）というテーマを内に含んでおり、この視点からロシア・マルクス主義哲学を再解釈する可能性に道を開いている。

本書の緩やかな構成には、さらにもう一つの利点がある。本書とは異なるさらに別の枠組みがありうることを、読者に示している。実際、ある章の論点やキーワードを他の複数の章にも見いだすことができる。本書は、本書の構成とは異なる枠組みやつなぎかたを見いだすような読みかたが可能な構造になっており、そうした読みかたを読者に求めている。

また、既に述べたように、本書はバフチンに一章を割いている。しかし、本書において、バフチンはけっしてロシア思想史全体から遊離しているのではない。バフチンは第２章以降の各章と密接にかかわっており、いきおい読者はそれぞれの章をバフチンと対照させながら読むことになる。また、バフチンに独立した章を与えているからといって、バフチン一人を特別な存在にしていると見るべきでもない。桑野は、20世紀初頭のロシアには「複数の学問に取り組んでいる」ため「「専門は○○」と書けないような博学者」（vi 頁）が数多く存在する、と指摘している。実際、本書でも複数の章にくりかえし登場する思想家が何人もいる。では、バフチンに代えて、宗教哲学者フロレンスキーを第１章にあて、第２章以下の各章をフロレンスキーと対照させて描くとどのような「ロシア思想史」ができあがるのだろうか？　あるいはマルクス主義者ボグダーノフだったらどうだろうか？　そうしたことを試みてみたいという思いを生じさせる。本書は、そうしたロシア思想史の組み換えへと読む者を誘う。

なお、本書はロシア的文脈を超えた世界的価値を持つ思想や事象に主眼が置かれているが、本書でとりあげられている思想の中で、依然としてロシア特有のものの枠内に留め置かれている感があるものが２つある。宗教哲学とスターリン主義の公式哲学「弁証法的唯物論」である。

本書は、宗教哲学を西欧思想における「実証主義への反逆」の中に位置づける可能性を示してはいるものの、宗教哲学の主要概念が定義できないものであることをくりかえし強調している。たとえば、「全一」については「けっして一義的ではない」、「ソフィア」は「あまりにも多義的」、といった具合である（28-29頁）。さらに「注」において、ロシア宗教哲学の用語は、「近代西洋哲学の知識からすれば理解困難なものが多い」として、「存在」、「現実」、「本質」、「世界」、「進歩」、「魔術」、「愛」、「完成」をあげている（243-244頁）。実際、ロシア宗教哲学研究は、こうした難解な用語をめぐる議論に終始する傾向が強く、ときにある定義不能な概念を別の定義不能な用語で説明する堂々巡りに陥っている。そしてこれらの概念が「ロシア的なもの」を体現していると主張されてきた。しかし、ロシア宗教哲学をこの現状から脱却させ、それを翻訳可能な言葉で語ることができるようになれば、宗教哲学にも「ロシアの運命」の枠を超えた新たな意義を見いだすことができるようになるかもしれない。

これと関連して、桑野は、近年ロシア本国でバフチンと宗教哲学との共通性を指摘する議論が増えていることに言及しながらも（21頁）、宗教哲学をあらかじめ定められた結論への統合をめざす「モノローグ」的なものであるとみなして、バフチンの対話原理との差異を強調している（11-12, 104-105頁）。桑野はこれまでも、バフチンを宗教哲学的に解釈することにたいして、異を唱えてきた。[4] 宗教哲学に回収されることでバフチンの対話原理が損なわれることを警戒するのはわかるが、バフチンの対話原理と関連させる視点がロシア宗教哲学に新たな解釈をもたらすこともありうるの

ではないか。

また、ソ連の公的哲学である弁証法的唯物論については、「教条主義」、「きわめて図式的で楽観的」（160-161頁）と特徴づけられているのみである。たしかに一般的に、弁証法的唯物論は古い硬直した機械論的唯物論への回帰とみなされている。しかし、これについても、本書の各章の論点とより深く関連づけることによって、新たな解釈が導きだされる可能性がある。たとえば、弁証法的唯物論の中に、人間の能動性と世界発展のダイナミズムを見てとることはできないだろうか。

このように、本書は、ロシア思想にはじめて接する読者にとっては最良の入門書でありながら、ロシア思想史の組み替えと再解釈という今後のロシア思想史研究にとっての大きな課題をも提示している。

注

1　桑野隆「日本ロシア文学会大賞（2017年度）受賞講演　20世紀ロシアの人文知の魅力」『ロシア語ロシア文学研究』第50号、日本ロシア文学会、2018年、260頁。
2　ザパタ、ルネ『ロシア・ソヴィエト哲学史』原田佳彦訳、白水社、1997年（原著は1988年刊行）。
3　桑野隆『夢みる権利 ── ロシア・アヴァンギャルド再考』東京大学出版会、1996年。
4　たとえば、桑野隆『バフチン　新版 ──〈対話〉そして〈解放の笑い〉』岩波書店、2002年、255-261頁、桑野隆『バフチンと全体主義 ── 20世紀ロシアの文化と権力』東京大学出版会、2003年、2-27頁。

（岩波書店、2017年、xi, 248, 10頁）